

新しい平和の構図を考える

S G I の目指すもの

平野友三郎

昨年末のマルタの米ソ首脳会談で冷戦終結が確認され、東欧の民主化が急激に進んだことなどに見られるように、九十年代を迎えて世界は大きな変革期にある。

私もここ数年、アメリカやヨーロッパなどで平和問題に携わっている人達を取材しながら、ずっと平和の問題を考えてきたが、劇的にアメリカとソ連との関係が変わりつつあるということを実感する。

今年の二月から三月にかけてアメリカを取材して回った印象では、アメリカ人のソ連に対する見方が非常に変わってきている。かつてレーガンがソ連を「悪の帝国」

ソ連を悪者扱いしても受けない。ではどこに敵を求めたらいんだという論議が出ていて、それが新聞で話題になったりする。最近、エネミリース、つまり「敵の消滅」ということが安全保障の問題との関連で言われるが、時代の急激な変化が平和や安全保障の問題にまったく新しい発想を要請しているといえよう。

このように世界が緊張緩和という方向に劇的に移りつつある一九九〇年代の出発点というのは、一つの過渡期の時代ではないか。東西の冷戦終結がアメリカとソ連の間で確認された。そして新しい世界の秩序というものはまだ明確には見えてこないわけだが、模索されつつある、そういう過渡期にあるのが現代世界の大きな特徴である。

なかでも特徴的なことをいくつか考えてみると、先進国間で大きな戦争をやるということはもうおそらくないであろう。戦争がおきたら、これは核兵器もあることであるから地球全体が破滅してしまう。こうした状況の中では先進国間の大きな戦争というのはないと予測される。

と名指して批判して、アメリカ人も全体としてソ連を軍事的な脅威としてみなしていた。そういう時代が長く続いていたわけであるが、今年の春、アメリカで非常に話題になっていたのは、ハリウッドの映画製作者が今非常に頭を痛めているという話だった。

スパイもの、たとえば007のジェームズ・ボンドの映画を作っていた人達が、一体「敵」を誰に定めたらいいのか困っている。かつてはKGBのようなものを出すと、大体これが敵にびったり当てはまっていたのが、今やソ連のKGBと言っても迫力がなくなってしまった。

もう一つはグローバリズムということが、これほど世界の民衆レベルで意識の中に浸透している時代はかつてなかったことではないか。物とかお金とか情報というのが国境を越えて非常に急速に行き来しているというボーダレス時代を迎えて、相互に依存しあっていく以外、人類が本当に発展していく道はない。現実にもそういう事態になっているし、人々の考え方もそうした方向に向かいつつあると思う。

もう一つは、昨年の東欧の変革に象徴されるように、民意の時代ということがある。民衆の意思を無視しては政権自体がなりたっていない時代を迎えている。

しかし、過去の歴史を見てみると、それほど単純に単線的に事態が推移することはないことが分かるわけで、実際に大きな問題として残っているのは、第三世界で依然として紛争がなくならないという点だ。それどころか、紛争が内戦化して非常に悲惨な状況になっているという実態も見られる。

少し展望をいえば、たとえばアメリカとソ連の間では、ほぼ戦略核の五〇%削減が大筋では合意されているとい

うところに見られるように、核兵器の軍縮はかなりのスピードで今後進む可能性がある。ただ核兵器以外の通常兵器を劇的に減らすという事は、まだ相当な時間がかかるのではないか。世界的な軍縮の流れはたしかにそうした方向には向いているわけだが、まだ楽観が許されない。

二十世紀の歴史を考えると、二度の世界大戦というのは人類にとって極めて大きな体験であった。特に第二次世界大戦で非常にたくさんの方が亡くなり、もう二度と大きな戦争はしたくないという結論みたいなものが出たわけである。その中で国際連合というものを作って、国連憲章を生み出したわけだが、国連憲章の中では実際に戦争が禁止されるということとはなかった。

ただし各国が紛争を平和的に解決するという事は義務づけられたわけで、攻撃的な侵略戦争はともかくやめようという、一種の合意が国連の中で出来上がった。これは一歩前進であったが、周知の通り、戦後の世界の歴史は、そういったこととは別に戦争の歴史でもあった。

アメリカとソ連の間では、核兵器を中心として、軍備

の拡大競争が一貫して続いてきた。この軍拡競争を動かす要因となったのは、恐怖と敵意であった。いつ相手から核攻撃されるか分からない、恐怖感というものがあって、この軍拡競争をストップすることが出来なかった。

資本主義と共産主義のイデオロギーの対立、敵意というものも存在した、そういう歴史が続いたわけである。それが、最終的には昨年のマルタの米ソ首脳会談で戦後の冷戦構造というか、対立構造に終止符がうたれて、新しい世界の秩序を模索する時代に入ったといえよう。

その意味では一九八九年という年は、二十世紀の歴史において非常に大きな転機の年として歴史に残るであろう。つまり人類は、あの第二次世界大戦の戦禍を反省し、二度と戦争をしない方向に行こうとした初心というもの、ここで取り戻して、新しい平和の構図を考えていかなければならない、みんなで知恵を出し合って考えていかなければならないという、転換期にさしかかっているのではないかと気がする。

今年の三月にカナダで取材したトロント大学のアナトール・ラバポート教授は長く平和研究をしているが、

教授がいつも指摘していることは、戦争の原因はどこにあるのかということである。いろいろな考え方があがるが、ラバポート教授は戦争それ自体が制度であり、それ自体が体制になっていることを最大の問題と考えている。つまり戦争体制、戦争組織が強く社会のなかに制度として

食い込んでおり、それが戦争をおこす最大の要因になっていると見ている。

したがって現代では、戦争の原因というのは人間の心の中にはないとラバポート教授は言う。たしかに制度としての戦争体制、戦争組織というものは、たとえば産軍学複合体というような存在が戦争をおこしていくというその視点は非常に大事だと思いが、戦争の原因が人間の心の中になんかということはい過ぎだと思われる。

そうした制度を支え動かしていく人間の行動や人間自身の問題を抜きにしては、複雑な戦争の中身というものは考えられないのではないかと思う。いま仏教的な視点から人間の内面の問題が指摘されているわけであるが、人間の内面の問題、即ち人間の欲望とか怒りとか不信とか、裏切りとか、暴力を生み出す様々な要因を、ど

うやって平和的な方向に転換していくか、そういう仏教的な平和思想を社会の中にいかに組み込んでいけばいいのかが重要だと思ふ。これが一つの論点である。

もう一つの論点としては、世界の人々が行動する一つの集合体（アクター）として、行為者として意志表示が出来る状況が徐々に生まれつつあるのではないか。これは核兵器の問題とか、環境問題とか、地球全体が破壊されてしまう脅威に直面して、人類が一個のアクターとして行動する状況が生まれつつあるということである。

今までそういう状況がなかっただけに、これは一つの希望的な状況判断でもあるわけであるが、現実にもう少しの流れが生まれている。したがってさらにこの流れを強めていけば、人類にとって希望が出てくるであろうというのが第一の論点である。

第三点は、さらにつきつめて考えなければならない論点として、今、様々な地域で民族問題が世界の平和にとって大きな鍵を握るものとなって出てきていることである。ナショナリズムの課題、民族問題を解決するというのは非常に難しいけれども、これを避けては現代の平和

の問題は考えられない。

たとえばスペインのカタロニアの独立運動というような形の動きがあるわけである。国家を離れて地域の動きが強まってきている。もう一方の流れとしてはECの統合にみられるように、統合という流れもある。

この二つの流れをどのように調和させ、平和的な潮流をグローバルに生み出していくかというのは、非常に難しい問題であるが、いずれにしても両方の流れは国家の枠組みから離れるという流れである。国民国家という概念ではすでに括れない、人々の意識の変革というものが生まれつつあるわけである。

このように主権国家そのものの存在が問われる中で、人間のアイデンティティの問題が出てくるわけで、アイデンティティをどこに求めるのかということが問題になってくる。そこで非常に大きな鍵になるのは、地域ということではないかと思う。これからは地域から地球につながる視点というものを考えていかなければならない。

問題意識としては、先に挙げた三つの点を先ほど川田氏の方からいろいろ指摘があった、内在的普遍、あるい

は相依相関性とか、人間の生き方としての菩薩道の生き方とか、そういうものと関連させながら、一つの平和構想というか、平和戦略を私達としては考えていかなければならないと思う。

(ひらのともさぶろう・聖教新聞社論説委員・元ハーバード大学科学・国際問題センター客員研究員)